

「中国人」とは何か

同じ中国人なのに台湾経済が世界の注目を集め、一方の中国は近代化に苦悩している。一体、どちらが本当の「中国人」なのか？

対談 邱永漢 中嶋嶺雄

きゅう・えいかん/作家

なかじま・みねお/東京外国語大学教授

中嶋 私が邱永漢先生の書かれたもので一番感銘を受けたのは『香港の挑戦』（中央公論社）です。邱さんが書かれたように日本がいまなってきたてきいますね。

邱 私のものでは硬派なものです。（笑）

中嶋 副題が「日本経済人への警告」でした。香港の企業活動はバイタリティーがあつて、日本はその挑戦を受けているという記述の後半部分は、これからの日本のあり方を実に冷静で説得的に著されていきました。日本の経済人のおごりを戒めながら、今後の日本のあるべき姿を軍事力じゃなくて経済で行きなさいと。

八〇年代当初にあれほどはつきり言っておられた人も少ないですよ。最近では長谷川慶太郎さんも同じようなことをおっしゃっている。

邱 日本は自分から選んだわけじゃないが、あちこちからこづかれながら、結果として軍備をもてないものだから、そのぶん全精力を、ものを作って外国に売ることに使ったわけです。その結果、軍事力を背景としないで、世界の一等国になるという、歴史はじまって以来なかったことを実現したわけですよ。

中嶋 「非武装中立」や「平和主義」ではどうしようもないんですが、もっと現実的に日本は経済全体の可能性を考えたシナリオを、偶然にも戦後継承してきたわけです。これからは軍事力だけで世界を支配するという時代は終わって、経済、つまり、社会がどれだけ成熟しているかが大事

になってくると思うんですよ。

邱 それから、前の戦争で、日本は占領する側にまわったから、占領される側の痛みを知らない。踏まれた方はいつまでもその痛みを覚えていくんですよ。そして、「昨日の敵は今日の友」というんだから、日本人はもの忘れのよい国民だと思われている。経済がこれだけ強くなったうえに、軍事力も重ねていけば、再び上陸してくるんじゃないかと、踏まれた国民は解釈するから、経済で今後も行きなさいと、一九八一年に書いたわけです。

中嶋 幸い、そういう批判の声があつたおかげで、日本はうまくやってきた。同じことが、台湾についても言えると思うんです。

台湾の人たちは自分たちにもっと自信をもつてよいと思うんです。

邱 蔣経国の健康がすぐれず、医学的にもそう永くないといわれています。台湾政府も彼の後の事については憂えているんですが、不安要素として残っていますね。

旅を降ろして、地域が別、社会体制も別でという形でいけるかどうか。この二つの中国問題については、香港はこれまで台湾のことを無視してきましたが、最近にわかに、もし香港を冷酷に扱うことになれば、台湾も中国に反旗を翻すことになるぞと、香港も言い出した。そういう意味で、香港と台湾が共同体的な意識を持つようになった。これは、以前には予想もできなかったことです。

一人当たりのGNPが三千ドルに達した台湾

邱 七〇年代に日本が省エネ、オートメーション化を割にうまくやり、一段と国際競争力をもって、台湾や韓国をうーんと引き離れた形で進んだわけですが、その時に、私は台湾がそれに追いつけないんじゃないかと思いました。そのうえ中国とかフィリピンとかもコストのやすい国が、縫製加工業とか雑貨業とかで追いついてきたら、日本には追いつけないし、後ろからはすぐ追いつかれてしまう不安に思った時期があるんです。

ところが、二年前くらいから、台湾は外貨がたまって、昭和四十七年の日本での過剰流動性のようなことが、今に起こるだろうと思ったわけです。台湾で雑誌を出していたから、そのことを雑誌で話したんです。それから急速にそういう形になってきましたね。

それから近頃、気づいたことは、イギリスは植民地だったところを「点の開発」はしたが、「面の開発」はしなかったということ。ポイントだけを開発するから、香港の街でも三十分ほど車で走っていったら、電気が通っていない。そういう開発の仕方だったんです。もちろん最近では電気が通っています。

ところが、日本人は自分の利益のためにやっただろうが、割合におせっかいなところがあって、植民地統治でも自分たちの国と同じようにやらないと気がすまないらしいん

ですよ。山奥の山林屋にも電気を通したんですね。韓国でも。それが、シンガポールや香港と違うところなんです。

ですから、無意識だけれど、基礎を作る時に日本人が作ったものの上に築くという形でやってきたので、台湾や韓国の経済は日本のピンチヒッターができるようになった部分があると思うんです。

中嶋 それだからといって、日本の植民地統治を正当化はできないが、確かに功の部分も冷静に見てみる必要がありますね。

中国と台湾を比較してみると、中国はまだ文盲率が三〇%で、共産党員でも十人にひとりか文盲です。ところが、台湾や韓国は文盲率がほとんどゼロ。そういう意味での近代化の基礎やインフラストラクチャーが日本統治時代にできていたということは、まあ、客観的にみて、評価され得ると思うんですよ。

台湾をみてみると、一人当たりのGNPが二千ドルを超えるまではたいへんだったと思うんです。だが、これを超えると、人口千九百万人というサイズですから、立派な国家になると思うんです。香港やシンガポールは都市国家で、貿易依存度も高いから、海外の影響を非常に受けやすいわけです。それに対して台湾、韓国は、国内市場をもっています。

しかも、台湾は昨年一人当たりGNP三千八十ドル。二千ドルを超えたわけですから、ここからは順調にいきま

すよ。今世紀末には、七、八千ドルから一万ドルくらいになるんじゃないですか。

邱 韓国の三星グループの李社長が、いつも僕に「台湾が一人当たり三千ドルということはないでしょう。なにしろ中国人は脱税の名人だから、五千ドルくらいじゃないですか」といいます。(笑)

ここ一年のうちにアメリカから要求されて、ドルに対して元の二〇%の切り上げをしないと、いけなくなると、三千ドルがそのまま四千ドルになるわけです。

民主国家の二つのものさし

中嶋 それだけに、成長してきた台湾の経済、政治の在り方がこれからほんとうに問題になるんじゃないですか。僕はその点においてはかなり楽観的ですが。

千九百万人の九〇%以上が台湾に生まれ育った人たちで、その発言権も無視できないですよ。経済が成長して貯蓄率も高くなった。しかも、一般の人たちが海外に旅行できるようになったことはたいへん大きいことですよ。

邱 そうなんです。私はかつて台湾のある新聞にコラムをもっていた。ところが、その新聞は私が書いたコラムは困るといったんです。それで、「事実萬報」という野党系新聞社の編集長のところへもって行って、「おたくで載せてくれ」と言ったんです。それで載せたんです。

それには、こう書いたんです。

「国が民主的であるか、ないかというものさしは二つある。ひとつは、その国の長を批判する本が売られているかどうか。もうひとつは、その国の人が外国に出ていく自由があるかどうか。その尺度でみると、台湾はあまりかんばしくない。昔にくらべれば、少しはよくなったが、どこに自国に帰る時にいちいち大使館に行つて許可をもらわないと帰れない国があるのか。台湾は貿易立国だから、よその国にものを売らないといけない。よその国の人がどんな生活をしているのか分からないで、どうやってものを作るのか。入ってくる人をチェックしないと中国のスパイが潜り込むかもしれないというが、チェックをしたらスパイは潜り込まないのか。規制をしても、現に外国に行こうとする人はみんな外国へ行っている。それなら、少しでも台湾の人たちにチャンスを与えるほうがいい」

それが新聞に載った瞬間、調査局長から私のところへ電話があつて、いまうちのものを行かせますけど、なるべく刺激しないようにお願いしますといってきましたね。

それを書いてから四年たつて、かなり自由になったんです。それで勝負があつた。

私がいろいろ言わなくても、一年に三十万から四十万の人が外国に行つて、よその国がどうなっているかを見てきたら、それで黙っているわけじゃないですからね。

中嶋 その点では徐々に開かれていますね。また台湾経済が、アメリカとの貿易で百三十億ドルもの黒字を重ねて



邱 永漢氏

頭からかぶさってくるんですよ。そうすると、やはり社会制度の問題になるんですね。

邱 大陸の中国人も台湾の中国人も、中国人という基本的特徴を備えていることは同じなんです。だけど、一方は経済が発展し、もう一方は発展しないという理由がどこにあるかとなると、ひとつには先に言ったように日本の洗礼を受けたということがあるが、やはり、基本的に自分が一生懸命働いたら自分の収入になるかどうかですよ。

それに中国人は一番こだわるんです。ですから、それを多少認めると鄧小平が言ったとたんに、農業の分野だけで

いるし、外貨準備高は日本と三十億ドルの差まで迫ってきていて、いまでは世界第四位です。そんなことは一般に日本の新聞では知らされていないが。

だから、もっと自信をもってあらゆる面で自由化を進めても怖くないはずですよ。逆に中国のほうでいま、台湾の恋愛小説などが若者のあいだで人気があります。それを精神汚染だとか言っているが、水は高いほうから低いほうへ流れるわけですからね。そういう意味では、中国大陸の人たちが台湾にくれば、かえってこれはかなわないと思うんで、見せたほうがいい。だから自信をもていいですよ。

邱 スパイのほうがかつちに住みたいという(笑)。中嶋先生も台湾を経済成長する国々にいれておられるが、中国のほうはまだ入っていない。

私も中国が、その仲間に入れるか、入れないかというのは、これから十年ぐらいのあいだに中国がどういう政策をとって中国人がどう動くかによって決まると思いますよ。中国人自身は素質は十分に持っているんだけど、社会制度と経済の発展レベルの二つの壁がありますから。それ乗り越えられるかどうかですね。

商人型工業の中国人は技術蓄積が苦手?

中嶋 これまでは、日本はアジアにおける近代化、工業化の例外だといわれてきた。それがいよいよ例外ではなくなりつつある時代になっている。日本をモデルにして、台

湾も韓国も日本をキャッチアップしました。ここ二、三年になって、日本が再び軍事力でアジアに進出するなどというのではないということが、ようやく認識されだした。ですから、シンガポールでも「日本の経験に学べ」と言われだし、マレーシアでも言われている。

そういう状況のなかで、次に、台湾の工業化が中国社会の例外なのか、それとも普遍的なものかということが問われるのです。

よく言われるのですが、中国人は流通機構を通じて、ネットワークを張り巡らすことが得意なんです。日本人社会がタテ社会だとすると、中国人社会はヨコ社会なんです。ヨコ社会の中でも、ものを動かして利益を得ることに関しては中国人は天才的です。それが、工業化ということにおいてはうまくいくのが、これからの課題ですね。

台湾の場合は戦後、産業構造の転換を思い切ってやめた。蒋介石独裁体制というとなんだが、一種の強権体制で都市の工業化を行うために農村人口を減らし、そして外資をどんどん導入した。

一方の中国の場合は、毛沢東独裁政権のその弊害を差し引いたら何が残るのかというと、マイナスだけが残るのではない。まったく工業化の基礎ができていないんです。

だけど、台湾に近い福建省とか広東省をひとつの台湾省のように考えれば、可能性がないことはないはずですよ。

ところが、そこにどうしても共産党政権、社会主義政権が

も四川省から始まって大分回復した。やはり社会制度が大きな影響を与えていると考えざるをえないんです。

ただ、台湾も香港もそうですが、中国人は商業の民であるということから始まっていますから、工業をやるのも商業的工業の経営なんです。

たとえば、八百半デパートがシンガポールで商売を始めて、ある時期にピンチに陥ったことがあるんです。日本人だったらどうしたらこの商売を立て直すことができるのかというぐあいに考えるけれども、シンガポールの華僑の連中はみんな「やめればいい」と言うんですね。

工業をやる場合でも、この仕事以外に俺たちは食っていく道はないんだぞ、というような粘り強さは中国人にはないんです。これがダメなら、あれでいいじゃないかという発想が強い。ですから、技術蓄積型の商売は、日本人に比べて苦手です。

中嶋 香港のニュー・テリトリーズ(新界)では八百半も成功しているようです。そこへ、日本のそごうデパートが銅鑼湾の一番いいところにデパートを作ったようですが、あまりうまくいってないようです。

邱 日本のジャスコとユニーも向かい合ってデパート商戦をやっているようですが、流通関係の商売は中国人にまかせておけばいいんです。

しかし、日本の流通業のやり方は、中国人の商売の仕方を真似ていくだろうと思うんです。というのは、日本人は

安売りをするとか、ちょっとしたことを金儲けの種にする
ということとは得意じゃないが、基本的にサービス精神があ
る。

中嶋 アフターサービスが優れていますね。

邱 それに、品揃えについての努力とかは中国人よりも
はるかによいものをもっています。

ですから、現地と一緒に、日本企業の代理店を手伝って
日本企業から東南アジアでものを販売するノウ・ハウを学
び、金持ちになった華僑の連中がいっぱいいるんです。彼
らが流通業に出てきて、現在、日本のデパートとタイアッ
プして次の展開をやっているんです。

だから、今年から三年ぐらいのあいだに、東南アジアは
日本流通業の激戦地になりますよ。

中嶋 台湾にも日本のデパートが進出したしています
ね。

邱 最近、そごうデパートにも許可がありました。ジャ
スコも現地企業との合併ができました。西武も三越もイト
ヨーカ堂も合併相手が決まっています。

外貨不足で深刻な日中貿易

中嶋 最近、日本企業と中国との商談があちこちでト
ラブルを起こしていて、八千億円ぐらいの商談がトラブっ
ています。そういうこともあって、いまや日本企業はどこ
も台湾に目をつけて、投資ラッシュはすごいですね。経済

は無政府的に客観的に動きますから。実際に、そういう方
向で東アジア経済圏は動いているんです。

台湾の人口は千九百万ですから、中国に比べ六十分の一
にもかかわらず、台湾は貿易総額では中国に匹敵するくら
いです。今後、台湾はもっと増えるでしょう。一方の中国
は依然として産業構造が転換できないでいる。日本に売る
ものだって、石油、石炭、食糧など第一次産業品ですか
ら、どうしても貿易量が増えれば増えるだけ中国側が赤字
になります。しかもこれらの製品は日本には現在あまりい
らないもの。これから情報化が進めば進むほどいなくな
るでしょうね。

最近では、中国の経済も少しくなってきましたから、
みんな小銭をためて日本製品を買おうとしている。しか
し、あれだけ人数が多いとすぐに外貨が不足してしまうわ
けです。現在は、三、四十億ドルぐらいしかないと思って
いますが、外貨が不足すると外貨規制をする。それで貿易
契約がキャンセルされる。だから、日中貿易は深刻なん
ですよ。

それに対して台湾は、あれだけのお金を動かしているわ
けです。第三次産業も世界有数です。そのあたりのこと
が日本ではあまり知られていないですね。

邱 昔、日本が貧しかったときには、一億の市場といっ
ても世界中の人がそんなものと気にもとめなかったわけ
です。ところが、だんだん金持ちになったら、いまやフラン

はそうしたことがなかなかうまくいかない。しかし、ハ
ウオリンビックをこなしていけば、韓国の人は優秀です
から第二次産業、第三次産業も回復し、九〇年代には対外債
務も解消していくでしょう。そうなってくると台湾につい
て韓国も落ち着いてくるんじゃないですか。もう少し時間
がかかるでしょうが。

邱 台湾政府の発表では、六月には三百億ドルの外貨を
獲得したといっていますが、あれは粉飾決算なんですよ。
実際には四百億ドルなんです。

中嶋 そうでしょうね。いま台湾の銀行はお金がありあ
まっているんじゃないですか。

邱 普通預金ならいいらしいが、定期預金はおことわり
しているらしいですよ。(笑)

いまの台湾は、十四、五年前の日本と同じように、いっ
たんは地方銀行に外貨を集めて、それから台湾のお金で一
般の人に貸い出すというシステムですよ。たまるのが一つ
のブールだから、わーっと増えるわけです。アメリカから
攻撃されると思って、一生懸命、銀行に、お前のところは二
十億ドルを持て、お前のところは十五億ドルを持てとやっ
ているわけです。その分も入ると四百億ドルになる。

台湾にも多少債務があります。電力会社などが抱えてい
ますが、政府は債務の多いところへはお金を貸すから、早
く返済しなさいと指導していますよ。

中嶋 そういう意味からも、アメリカから元の切り上げ



中嶋 嶺雄氏

報」に論文を発表して、「資本主義のほうか、共産主義の目指した労働の疎外とか人間の解放をやっているじゃないか」という大胆な論文を書いた。また、私が注目しているのは今度の文化部長になった王蒙です。彼は、五七年の百家争鳴運動の時にたいへん鋭い小説を書いたんです。「党組織部にきた青年」という、日本でいえば大島渚の「日本の夜と霧」のような作品です。人間の解放をめざすべき共産党本部にはいつてきたら見てはいけないものを見てしまった、各部組織のいわば官僚機構・党幹部の腐敗、墮落を。そういう鋭い告発をしているんです。その彼が文化部

中嶋 不幸にして現在、政治的には台湾は認知されていませんが、経済の現実はそのを超えて動いています。二十世紀は「経済の時代」と言われていますが、台湾がここまで成功してきたということは、言ってみれば、今日は「民活の時代」といわれていますが、台湾は民活の時代の国際版なんです。国連とかIMFとかの国際的な公的機関がもう力をもっていないんです。国際社会から公的には締め出された台湾がなぜここまでいいのかわからないことは、研究するには非常にいいテーマです。国際関係がずいぶん変わってきているんです。だけど、日本人はその辺がわからない。それに、中国と商売をやって儲けようとか考

お金を儲けを罪悪と考えない中国人

を要請されているが、やっても大丈夫じゃないですか。邱 それをやったら、台湾の人たちは真っ青になりますよ。(笑)

中嶋 この春久しぶりに台湾の高雄へ行ってきましたが、中国の深圳経済特区と比較すると、雲泥の差がありますね。深圳なんかとてもじゃないが比較にならない。高雄あたりにオフショア・バンキングセンターなどを作っている切ったやったら、香港なんか吹っ飛んでしまおうでしょうね。

邱 高雄だけでなく、いっそのこと台湾全部そうしたらいい。

えているが、儲けることに限しては、日本人より中国人のほうが上ですよ。毎日儲けることを考えている中国人と商売をやって儲けようということ自体無理ですよ。

中国の人たちは儲けることを罪悪とは思えない。むしろいいことだと思っています。広東あたりでは、旧正月の新年の挨拶に「恭喜发财」、つまりお金が儲かるように、と書くわけですよ。日本人がそんなことを書いたら、あいつは守銭奴じゃないかと思われるけれども、中国人の金銭感覚からすればむしろ当たり前のことなんです。お金を儲けることが生活の一番基本であって、それはいいことだという感情があるんです。

邱 お金が儲かって、おめでとうということね。

中嶋 だから、いずれは中国も資本主義になりますよ。

邱 中国人は一番共産主義に向かない国民なんです。それだから、共産主義にした。そのままほっておいたら貧富の差がはげしくなってしまうから、その反動として共産主義があるわけです。だから元に戻りますよ。

一人当たり二千ドルで中国自由化は本格化

中嶋 中国は一人当たりGNPが二千ドルになったら、共産主義体制が内部から本格的に崩れていきます。いまでも外部からの影響を受ける反体制の人たちの発言もある。また、中国共産党の中にも「人民日報」の副編集長を辞めさせられた王若水は、クビになっても上海の「文匯

長になった。これはある意味で革新的なことですよ。しかし、中国には、そういう面がでてくると必ずそれを押し潰す勢力がある。まだGNPが二百五十、三百ドルです。だから、社会主義が力をもつでしょう。だから、最近の中国が一部自由化をしたから、これで中国は西側化するというふうには、日本でも期待する人がいますが、それはどうですか。自由化が本格化していくのは一人当たりGNPが二千ドル台になったときだと思えますよ。それがいつかという、経済運営がうまくいって今世紀末には千ドルでしょうから、二千ドルになるのは二十一世紀の中頃じゃないですか。

邱 しかし、千ドルになったら二千ドルになるのは速い。お金というのは一番初めがなかなかたまらないものです。

中嶋 二千ドルになると国民生活が安定して、貯蓄率が高まり、社会資本が充実してくる。そうなれば将来に大きな変化がないだろうという安心感が生まれてくるんです。ところが、いまの中国は、鄧小平が死んだらどうなるかわからないと、誰もが思っているから、ちょっとでも自由な空気がでると日本の製品をわーっと買うんです。だから農村で万元戸(一戸)がでたりして、所得がアップしたりしてもみんな改竄したり、ものを纏めて買ったりして、スペンディングする。これではいつまでたっても、壁は越えられない。この壁が突破できたときに、中国は本格的に変化す

ると思います。民族性からしてもそうです。ただ、それは二十一世紀の課題でしょうね。

マルクス主義は二十世紀にはいろいろ実験をしたけれども、次世紀になると、むしろ共産主義の人たちこそ、自分たちが内部的に崩壊していくんじゃないかという脅威にとりつかれるでしょうね。

邱 社会党の衰退みたいなのですね。(笑)

私は、台湾とは長い間けんかして、帰ったのは昭和四十七年でした。そのとき一人当たりGNPは七百ドルだったんです。今年はおそらく三千五百ドルくらいになるでしょう。五倍になるのに十四、五年でなっているんです。

七百ドルのときに私は、台湾はすぐに千ドルを超えるという話をしたんです。そうしたら、みな「そんなことは無理だ」といっていたが、あっという間にそうになった。次に「いままで十年間かかってできた仕事は、これからは五年間でもっと大きくなりますよ」という話をした。結果的にそうになりましたね。三百ドルあたりが一番むずかしいんです。それがいったん、七百ドルとか倍になったら勢いがついてきますよ。

日本人の対中国政策は近視眼的

中嶋 ところで、中国がいつ、普通の人たちが自由に外国にいけるようになるかは一つの見所です。私の研究室にも最近、中国からの留学生が増えています。彼らに、

本当に中国を愛するならば、中国の民衆が将来社会主義の軌道からのがれていけるよう、そういう長期的な資本を投下するような気持ちに日本がならなければいけない。日本人はちょっとせっかちに、中国が政策を変えれば金儲けができると思って、わーっと中国に出ていき過ぎるんです。

中国人は本当は政治の嫌いな国民

中嶋 日本人は、中国の文化大革命とかを見て、「中国人は非常に政治的な国民」とイメージしている人が一般に多いようですが、それはそれなりの展開を中国がしていたこともあると思うんです。しかし、私は中国人はその逆なんじゃないかと思うんです。

邱 政治的な意識が強くなるのは、政治が悪いからなんです。だから、もし政治のことを意識しなくても生きていけるなら、中国人は政治の嫌いな国民ですね。

中嶋 自分たちの境遇とか、周辺の地縁・血縁の中で生きていく時には、いちばんアットホームな民族ですね。

邱 私がもし台湾に生まれなかったら、そういう政治的なことで亡命したり、いろんなことをする必要はなかった。だけど、実際のところすべてに大きく影響して経済生活だってまともにできないということが起こる。だから、中国の最近百年の歴史をみると、中国人は政治のことで頭の中がいっぱいになっていると見えるんじゃないですか。それに中国人は、あまり民主主義に適していないところが

「僕は中国共産党に敵しいけれどもそれでもいいのか」と言うと、「だから、先生のところへ勉強しにきた」と言うんです。そういう留学生をみているとじつに適応が速いんですね。これらの人たちが中国に帰って、社会を背負うようになったら、ずいぶん変わると思うんです。

邱 だから、日本は、東南アジアや中国からくる人がこれからも増えるわけですから、そういう人のためにお金を使ったらいと思うんです。

中嶋 そうなんです。中国のような一人当たりGNPが三百ドルそこらのところにテレビなどを売って、儲けることはないんですよ。そんなことよりもっと留学生の受け入れとかをやったほうが、はるかに将来的には日本に利益となつて跳ね返ってきます。中国全体の経済が底上げされない、日本だって困るわけです。

今後、日本の一人当たりGNPが二万ドルぐらゐになり、台湾も一万ドルぐらゐになる。香港やシンガポールは都市国家ですから急成長の歪みで今後どうなるかは不安です。香港の場合は一九九七年問題もあって、赤い商人、赤い資本家が香港をどこまで運営できるかという問題があります。少なくとも台湾、韓国などの周辺諸国、いわば儒教文化圏、漢字文化圏という、中国文化の影響を受けたところがみんな経済がよくなって、世界の経済の中心が東アジアになってきているにもかかわらず、大陸だけがようやく千ドルになるというのでは大問題ですよ。

ありますからね。

中嶋 多数決の合議は民主主義の基本ですが、合議すること自体がふさわしくないんじゃないですか。ある種の「独裁体制」みたいなものが分かりやすいんですね。

邱 これまで「独裁体制」でやってきたんですよ。いま、台湾は「独裁体制」が崩れているわけじゃないですが、これだけ多く台湾の人が外国に行って、みんなが自分たちの意見を口に出すようになれば、昔のままの形で「独裁体制」を維持することはできない。

これから台湾がどういう形に変わっていくかは興味のあるところですよ。

中嶋 中国人は、皇帝型権力になじみやすい。だけど、その皇帝を信頼しているかというところじゃない。ある意味で、ものすごい政治不信があるんです。本質的にニヒルなまでの政治不信を持っていて、そのことが逆に政治を見下しているようなボーズになるんです。複雑な社会問題があったから、それを解決するために政治が必要なのは当然ですが、日本人などより本質的に違うことは、やはり権力者に対しては不信感というか、権力を見放しているようなしたたかさを持っていることです。ここが、また、中国人の強いところなんです。それが、毛沢東がでると毛沢東へ、華國鋒がでると華國鋒へ、鄧小平がでると鄧小平へとみんな万歳をする。ほんとうに政治家を信頼していたら誰にでも万歳はできないはずですよ。だから、ほんとうは

不快感で対している。

邱 中国では銅像を建てるのは一番ばからしいことなんです。銅像を建てても、その銅像を建てたその人がつぎはその同じ銅像を引きずり降りすわけですからね。

中嶋 その辺は実に厳しいですね。日本軍が昔、中国の村を占領すると、農家の軒先には「節食壺漿」という赤い紙が貼り出されていたんです。

節食壺漿とは、この袋の中には飲み物も食料も入っていませんからどうぞ食べてください、ということなんです。日本軍がきたら、みんなそうするんですが、夜になるとちがつちゃうんです。そういうしたたかさで、ある意味では長いもの、強いものには巻かれるということでしょうが、それは政治を見下しているからできるのですよ。毛沢東の悲劇というのはそこにあるんです。大衆がほんとうにみんな毛沢東を支持して信じて、本心からそう思っているとなれば過信したんです。そこに毛沢東の晩年の悲劇があったんですよ。

毛沢東より周恩来が中国人をよく見ていた

邱 周恩来のほうが中国人をよく見ていた。彼は自分のお墓をつくらなかった。自分の骨を全部灰にして空から撒いたんですよ。というのは、中国人は鞭屍というのをやるんです。屍を鞭打つということをやるんですよ。

中嶋 日本人と違うのはそこですね。日本人は死んだ人

ら、むずかしいんですよ。

完璧性を求める日本人の美意識

中嶋 僕が一つ不思議に思うのは、香港でもそうですが、立派なビルが建ってちよつとすると街が全体的にくすんだ感じになるんですね。あれは中国人のものにこだわらない、ちょうど中華料理を食べる時にすこしきたなくして食べた方がいいということと関係があるんじゃないかね。

邱 いや、少し変わりましたよ。これが一人当たりGNPが五千ドルぐらいになればもつと変わるんじゃないですか。

それで、私がこれからやろうとしていることの一つは、台湾の子女にサービスとか人の接し方を教える学校をつくらうと思っているんです。お皿を並べるんだって投げるんですからね。それに食器の縁が欠けて疵だらけになっていてもそれを出してくるんです。昔、女房と台湾の店に入ってお茶をのもうとしたら、湯飲みに疵のないところはないかとさがしても全部疵だらけで、口を付けるところがなかった。いまでは台北の料理屋でも、疵のある食器を使っているところはほとんどなくなりました。けれど、人の扱い方とかサービスの仕方などは基本的に教育されていませんので、これをやらないといけないと思っています。

中嶋 美意識ということについて、日本人は完璧性を求めますね。日本刀にちょっとでも疵がついていてもいけない。

の悪口はいわない。政治家でも、マスコミは生きている時にさんざん悪いことを書いても、死んだら、ちゃんと評価して書くんです。それに対して中国人は墓まで暴きますでしょう。

邱 そう、屍を出してきてそれを鞭打つわけです。だから、私は毛沢東の全盛時代に、この人は将来鞭屍の対象になる人ですよと書いたことがありました。中国にいなかったからいいけれど、そんなことを中国で言っていたら命がなかったね。(笑)

それから、中国人が日本人と違うのは、日本人は批判されることを歓迎するんです。だから、だれかが日本にきたといったら、日本の新聞を見ると「日本の印象はどうですか」といった場合に日本の悪口を言っても全部載せるんですね。その点、中国人は違うんです。

私が台湾に帰っても「台湾はどうですか」とたずねられたら、「台北の都会の色は汚い、道がよごれている」と、もしも言ったとしても、翌日の新聞を見ると「邱永漢先生曰く、台湾は政治が安定して社会が発展している」となるわけです。また、私も中国共産党に対して私なりの批判があるわけですが、もし中国に行って、どう思いますかと聞かれたら「ここはよいが、あそこは悪い」と言いますね。でも翌日の新聞には「台湾の邱永漢先生曰く、中国は政治が発展して経済が成長している」となるわけです。そうすると今度は台湾の人たちが反発して騒ぐわけです。ですか

い、そういう一元的な美意識なんです。その点、中国人はどちらかというと、二元的な、陰陽二元論のなかで育っているから、こだわらない美意識の違ひかなあとも思っただけですよ。

邱 そうとはっきり言えないと思います。たとえば、日本人は古いものを大事にするという面があるけれど、薬は新しいものでないといけない。中国人は建物が古くなったらペンキを塗ってキンキラになれば奇麗と思っっている。でも、薬は古いのしか飲まないんです。

だから、それぞれの特徴が交流することによってお互いに変わっていくと思います。現に、私のところで養成している三十代の若者たちは、これまでの台湾のやり方を抜けて出しつつあります。それでも、金銭感覚というか、金銭的反応の強いことは日本人の比じゃないですね。(笑)

私が、二十五、六年前に日本はこれから経済を中心とした国になるから、お金の話をやろうとし始めたときは、下品な話をするとうまいわれたんです。女房も「あんたはよく飽きもせずお金の話ばかりするね」と言っていたんです。ところが、台湾に帰ると、女房が付いてきて、「あなたは台湾にくるとお金の話をしない人になりますね」と言うんです。周りが僕より十倍くらいお金の話をするから、影が薄くなるんですよ。(笑)

中嶋 その点は台湾の人も、中国の人も変わらないですね。

中国人社会は「人間関係社会」

邱 中国人に一番共通しているのは、関係社会ということです。日本人の社会は会社社会なんです。会社を中心としたものを発想するんです。会社の利益というか団体の利益が個人に優先するわけです。

ところが、中国人は親しい関係にある人のためならどんなことをしても力を貸すが、関係なかったらほっぽり出さず。ですから、誰かに会いに行くときも、私なら直接会いにきてもそれで済むけれども、中国人は誰と誰とはどういう関係にあつて、この人が言えはあの人が言うことを聞くと、そういうところをたどっていつて話をするんですよ。必ずそうですね。それは台湾もそっくりです。だから、人間なんて変わるように見えてもなかなか変わらないものです。

中嶋 悪い言葉を使うようだけれども、一種のコネ社会なんですね。コネクションを重要に考える。日本人はコネという悪いことと考えるが、そうじゃなくて、むしろそのことで、安心感があり、信頼関係が保てるわけです。

邱 林語堂は、「ある人が出世するかどうかは、人との関係だけ会って飯を食べているかどうかと関係がある」と言っています。中国人の社会はほんとうにそうなんです。仲のよい人と飯を食べるのは好きだけれど、仕事のためにまったくの他人と飯を食べるなんて嫌なんです。だから、

中嶋 日本の企業が中国と商談をまとめたが、それを一方的に向こうから契約を破棄してきたと日本人がよく怒るわけです。中国人は、契約よりも人との信頼関係を重視しますから、その辺がよく分からないと、商売をやるにしてもうまくいかないと思います。

邱 だから、関係社会というよりも「人間関係社会」といったほうがいいですね。ヒューマン・リレーションで成り立っている国なんです。だから、鄧小平が日本にきたら、田中元首相の家にいくわけです。日本人だったら避けて会わないですよ。

日本人は一方的に期待を抱きすぎる

中嶋 昔の人を大切にするという初歩的なことを大事にしている。だが、田中さんの場合は、日本人と中国人の法概念が違っているからだと思うんですよ。つまり、日本人の感覚からすると田中さんは犯罪人だという感じになるわけです。中国人の場合は法というものは人を処罰するためにあるわけです。だから、天子が法を犯しても民と同罪です。当然、天子も人間だから法を犯すんですよ。だから、法はできるだけ簡便にしたほうが都合がいい、権力者にも。法の網目をくぐり抜けて、いくらでも法解釈ができるわけです。庶民の側もいかに法から逃れるかということと毎日生きているわけです。ところが、日本の場合はローマ法以来の近代的な法概念の影響を受けていますから、契約

私だって、アメリカの人がきても、台湾の人がきても、シンガポールの人がきてもみんな女房にまかせて、押しつけるんです。(笑い)

もう一つ、日本人と違うことは、日本人は上の人がOKといつても全然仕事が進まない。中国人は下の人といくら話してもだめなんです。上の人がOKといつたらできるんですよ。

日本にアメリカ人がやってきて、通産大臣や外務大臣に会って「こんなバカなことがあるか、こうしてくれ」というと、大臣が「分かりました。よく考えておきます。ドゥ・マイ・ベスト」というんです。そうするとアメリカ人は「ドゥ・マイ・ベスト」と言うんだからいいだろうと帰国したら、何にも進んでいない。(笑い)

中嶋 意思決定のメカニズムが違うんですね。日本の場合、中間的な意思決定者がいて、それで調整をはかるわけです。下からやっていくんです。上の人に先にもっていくと、なることがかえってならないことがあるんですよ。そこが違う点ですね。

邱 日本人は植物だから、根回しが必要なんです。(笑い)。日本人のことをよくエコノミック・アニマルというが、これ、よく分からないですね。日本人はきわめて農耕民族的発想が強いんですよ。株式会社だって「株」という字を使っている。中国人は「股份有限公司」といって「股」という字を使う。動物の股なんです。

概念があります。中国人の場合は法はあつてなきが如し感覚があるんです。

邱 この他にも、日本人と中国人とは同根同士というけれど、お互いにカルチャーショックはいくらでもありますよ。

中嶋 それが意外に理解されていない。

邱 これからは、そういうカルチャーショックを味わいながら、だんだんお互いに理解していくようになるんじゃないね。

中嶋 だから、それがうまく融合すれば、今後のアジアは可能性があると思うんです。日本人は中国人をなにか同じように見ようとしているから、中国に変な憧れをもつわけです。いまの中国社会は非常に苦悩しているんです。その苦悩を知らないで、なにかバラ色に毛沢東時代や鄧小平時代を描くわけです。そういうギャップから日本が解放されていかなんといけな。期待があるから裏切られると、逆に「なんだ中国人が」という意識が出てくるわけです。日本人が一方的に期待を抱いていて、一方的に裏切られたと思っているわけです。最近『日本人と中国人ここが大違い』(ヘスゴブックス)という本を書きましたが、どうも日本人は中国の文化とか政治文化の体質を理解していないからそうなるわけです。

日本的なもの、中国的なものがある意味で融合していけば、非常に大きな可能性が生まれるのではないかな。

〈責任世代〉のクオリティ・マガジン

昭和60年5月21日発行 1406(1407)号
昭和59年12月4日 1405(1406)号承認 7925
昭和60年10月11日発行 1411(1412)号承認

知識

10
OCTOBER

特集 自由化中国の真実

〈対談〉「中国人」とは何か 邱永漢／中嶋嶺雄

自由化中国の悲劇 小室直樹

「自民復党」のホンネを話そう 新昇事長 山口敏夫

